

新年 あけまして おめでとうございます
本年もよろしくお願ひいたします



プラス思考で変わったこと

校長 安藤 邦寿

幼児児童生徒のみなさん、保護者の皆様、明けましておめでとうございます。

「おめでとう」という言葉に何となく違和感のある1年間でした。新型コロナウイルス感染症の第1波、2波、3波が私たちに立ち直る機会を与えないで立て続けに襲ってきたことにより、聾学校の1年間も大きく変わりました。年度当初、私はプラス思考で取り組みたいとお伝えしましたが、プラス思考でどのようなことが変わったのか振り返ってみたいと思います。

昨年まで当たり前に行っていた教育活動が当たり前に行えなくなり、今までの経験だけをもとにした思考はストップしました。一番大きく変わったのが「岐聾祭」です。高等部の発表はまだ終わっていませんが、3密を避けるため、参加家族の人数も制限させていただき、開催期日も各部で違う日を設定しました。発表に向けた練習は、各学級の練習を多くし、密になりがちな総練習の時間は少なくしました。しかし、このことは決してマイナス面ではありませんでした。短い期間で練習することで、時間を無駄にしないで集中して練習することができました。また、「岐聾祭」の劇発表的なものだけでなく、日ごろの学習の成果を集約して発表する機会ができました。決められた発表時間内に伝えたい内容を絞り込み、より伝わりやすい資料の作成、分かりやすい手話表現や口話について考え、工夫することで、子どもたち一人一人が、自分の苦手と向かい合い、それを克服する努力を重ねてきました。発表当日の子どもたちの姿は一人一人が主役となり、素晴らしいものでした。これは、例年と違った発表方法をとったからこそ見られた姿であったと思います。私個人としては、子ども一人一人が主役になれるようなこうした発表会が数年に1回ずつあっても良いのではないかと感じました。2つ目は、Webによる授業です。4月から6月中旬まで対面での授業が困難になり、Webによる学習支援が始まりました。回線の制約から時間や教科の数、画像の鮮明さ等に制約はありましたが、岐阜聾学校は全国の聾学校の中でもWebによる学習支援を実施した学校でトップ10に入っていました。家庭で課題学習をやるだけでなく、決まった時刻に、子どもたちと教師が互いの顔を見ながら授業ができることの大切さを感じました。Webによる学習支援の試みは、災害等で臨時休業が続くようなことが起こった場合にも活用できる方法です。3つ目は、自己の行動と体調管理に責任をもつという意識です。新型コロナウイルス感染症に対し、「うつらない」「うつさない」を意識し、自己の体調について細かく管理できるようになってきました。毎日、こまめな手指消毒をし、体温を測り、自分の体調の変化に気づき、自分で伝えて対応する力は非常に大切な力です。こうした一人一人の意識や行動の変化によって、現在インフルエンザに罹患した子どもや職員はいないという他の良い現象も起こっています。

ウィズコロナといわれる時代に、抗うのではなく、自分たちの生活をどう楽しく充実したものにしていったら良いかを考えるときにプラス思考が力になってくれると思います。新しい年がスタートしました。これからも新たな取組をしていかなければならないことがあると思いますが、保護者の皆様には引き続き、ご理解とご協力をお願いいたします。